

ローマ数字とは、西洋でローマ時代から用いられている数字です。

I, V, X などの文字を組み合わせで数を表します。時計の文字盤の数字や書籍の序文のページ番号などにしばしば用いられます。

### JIS X 0213 におけるローマ数字

ローマ数字は本来、I や V などの文字を組み合わせで用いるものですが、JIS X 0208 に対するベンダ定義外字の中には、「II」や「VIII」などを 1 文字の中に組み合わせたものを用意するものもありました（例えば Windows のいわゆる CP932 や古い MacOS の MacJapanese）。

JIS X 0213 は、こうしたローマ数字を国内実装互換として取り込んでいます。

漢字集合 1 面の、13 区 21 点から 31 点までに大文字の「I」から「XI」、13 区 55 点に大文字「XII」、12 区 21 点から 32 点までに小文字の「i」から「xii」があります。

これらは Windows のベンダ定義外字 (CP932) の上位互換になっています。

### Unicode におけるローマ数字

Unicode は上記のローマ数字を全て含んでいます。

ただし、Unicode 正規化処理の NFKC, NFKD によって、例えば「III」（を 1 文字にした符号位置）が「ラテン大文字の I の三つの並び」になるなどします。

### 関連項目

- ・ 国内実装互換